

2018年度組合員学習会「秋のまなびば」は、京都テルサとコーポイン京都にて3つの講演会を開催しました。コーポロでは2月号・3月号に渡り、学習会の内容をダイジェスト版でご紹介します。

子どもの貧困を知る学習会

京都生協では、子どもたちが豊かに育つ地域社会を目指して、様々な活動を行なっています。

今回は「山科醍醐こどものひろば」で、まちづくりをおして子どもたちに寄り添い、支援活動を行なっている村井琢哉さんに、子どもの貧困について私たちができることを教えていただきました。



むらい たくや
講師：村井 琢哉さん
特定非営利活動法人「山科醍醐こどものひろば」理事長。「山科醍醐こどものひろば」は1999年から、地域に住むすべての子どもたちが豊かに育つ社会環境や文化環境を充実させ、子どもたちの伸びやかな育ちに寄与できる団体を目指して活動しています。

学区による住み分けと貧困の関係

子どもの貧困について考えたとき、指標の一つになるのが「学区」です。家賃によって富裕層と貧困層の住み分けが起り、同じくらいの生活水準の人たちが、同じ学区に集まります。つまり、富裕層から貧困層の実態は見えにくくなり、貧困層はその学区に何代にも渡って住み続けることで貧困状態が慢性化し、自分たちの痛みが気づけなくなっているのです。

どこに住んで、どんな暮らしをするかは所得が大きく影響します。お金があれば住む場所や生活水準など様々な選択肢を持てますが、貧困層は選択肢が少なくなってしまいます。

型にはめずに、その子自身を見て

私たちはまちにあり続ける団体として子どもたちと関わっていますが、出会う子どもの背景にたまたま経済的な問題があることに気づいた時、自然発生的に活動を行

なっています。大人が貧困問題の解決を図るとき、まず「お金がない子」を探しがちですが、「貧困な子ども」という型に押し込めて考えるのではなく、その子自身の状態を知ることを常に優先しています。

子どもをとりまく環境

虐待の相談件数は、全国で昨年から1万件増加、いじめは2年前と比べ20万件増えています。このほとんどは心理的虐待で、言葉の暴力や面前DVなどが該当します。数字にあがってこない暴言・暴力もたくさんあります。父親が母親を殴る場面、または学校でいじめの現場を見た子どもたちは、相当な心理的ダメージを受けています。「明日はわが身」という危機感、恐怖感を抱きながら暮らしているのです。皆さんに気づいていただきたいのは、虐待やいじめの数ではなく、虐待やいじめが身近な家庭や学校にも「ある」という事実です。

子どもたちは与えられた枠組みの中で、「みんな一緒」「みんな仲良し」になって、自分がいじめられず、周囲と良好な関係を維持し生き延びるためのコミュニケーションをひたすら行なっています。そのためにスマホを欲しがり、習い事をしたがるのです。みんなが持っているスマホ

を持っていない、みんなが通う塾に通えないという事実が、子どもたちを苦しめるのです。友達との関係を維持するためにはお金が必要です。例えば、季節行事や友だちの誕生会に使うお金のために食費を削ったり、怪しいアルバイトに手を出したりする子もいます。10代の子どもたちは「みんなと同じ」であり続けるために、たくさん自分を削っているのです。学校へ行くことはもはや「お勤め」と一緒に、「学校にいる自分」を演じ続け、疲れ切ってしまうのです。これが、大人たちが虐待、いじめ、不登校など、表に出てきた問題だけを対処してきた結果です。

弱い立場の人を支えるために

子どもたちは、家庭や学校でのいじめや虐待から逃れて地域に逃げ出します。日中、地域にいるのは今まで地域を守ってきた自治会などの人たちですが、彼らもいずれ引退し、極端な世代交代が起こります。すると、地域のこれまでの文化・文脈は引き継がれず、子どもたちが困った時のためのノウハウも継承されないのです。

今、改めてこの本質を考えるべき時がきています。季節行事や地域行事、見守り活動などをはじめた人たちは、何らかの思いを持っていたはず。あと10～20年経ち、その思いを語る人がいなくなると、誰の言うことが正しいのか証明できず、最終的に声の大きい人、力を持っている人の意見が通ってしまう。貧困問題を抱える子どもたちは、力がなく声を上げられないことが多いです。今、地域を支えている力のある人たちと子どもたちを引き合わせて、どうすれば弱い人たちを支えられるまちにできるか。そのなかで、自分はどんな関わり方ができるのかを、ぜひ皆さんの立場で考えてほしいのです。

子どもたちが豊かに暮らせるまちづくりを

「貧しくて困る」と書いて貧困です。困りごとが生じて、お金がないために解決の手段を選べない、手段にたどり着けない、解決するための条件を満たせない。そして自由な選択権を奪われ、できないことが増えてしまう。結果、未来の選択肢が少なくなる。そういう時代が子どもたちに訪れないようにするために、私たちが貧困の問題に取り組んでいく必要があります。

困りごとにアプローチする方法を届ける、時間をかけて声を上げ続ける、声を拾ってくれるメディアや、活動を支えてくれる人たちの力を借りる。行政・議員に訴えて政策を変えていく。自分たちがどんな選択をしたいかを、子どもたちが豊かな人生を歩めるように考えながら選んでいきたいです。子どもの貧困というテーマから、私たちは改めてどんなまちをつくり、残したいと思っているのかを考えてみてください。



会場後方にフードドライブのブースが設置され、学習会に参加した組合員による寄付がたくさん集まりました。

子どもの貧困問題のために、私たちができること

1 自分の得意分野で参加

子どもたちと直接関わるほかにも、子どもが活動する場の提供、行政や議員への提案など、できることはたくさんあります。得意なことが思いつかない人は、まちで出会う子どもたちにつきり微笑みかけるだけでも構いません。自分の得意を考えるとところからはじめてください。

2 子どもの感覚に合わせた接し方を

地域に逃げた子どもたちが、私たちの前からまた逃げ出してしまうように気を付けましょう。大人と子どもの感覚は随分違うので、大人がアドバイスとして言ったことを、子どもたちは「怒られた」と受け取ってしまうことも。笑顔で話しかけるだけでも、何かが変わるかもしれません。保護者や学校にも理解してもらいながら取り組んでいきましょう。

3 声かけは「足し算の言葉がけ」で

例 「なぜ100点がとれなかったの？」 → 「80点もとれたね」
「静かにしなさい」 → 「大きな声出して、元気いっぱいやな！」

「引き算の言葉がけ」はできていない部分を指摘されている、つまり「結果だけを見て自分を見てくれない」と子どもが感じる要因のひとつ。「足し算の言葉がけ」は子どもたちが積み上げた現在地を承認して、今何をしようとしているかを確認するために行ないます。

子どもたちに対する心持ちを、少しずつ変えていくことが問題解決の第一歩になります。